

令和8年度 藻岩南小学校 研究全体会

2026年5月15日（金）



CONTENT

- 01** 本校児童の実態と課題
- 02** 実態と課題から生まれた研究主題と副主題
- 03** 目指す子どもの姿
- 04** 現在求められる学び・授業と本研究のつながり
- 05** 今年度の重点
- 06** 重点を目指すための視点 1
- 07** 重点を目指すための視点 2
- 08** その他



01

本校児童の実態と課題

昨年度までのアンケートや学力テスト結果から、以下のような実態と課題が浮き彫りになった。

1

読解力と語彙力の不足

文章を読まない・読めないといった苦手意識や、語彙不足などにより、問いに対して一言で答えて終わらせてしまう傾向がある。

2

受動的な学習態度

主体的に学習しているように見える児童もいるが、受け身で授業に参加する子も一定数おり、一部の児童だけで授業が進行してしまう実態がある。受け身の児童は、学習に対して当事者意識が薄く、他者や学習内容との関わりが乏しい様子が見受けらる。

3

「聴く」ことへの土台不足

ただ聞いているだけで内容を理解していない、あるいは相手に耳を傾ける姿勢が整っていないため、友達の意見を聞いても自分の考えを深めるまで至っているとはいえない。

4

自己評価と実際の力の差

児童の自己評価は高い。しかし、学力テストの結果や教師が感じる実態との間に差がある。一方、ぼくら学級の児童はその反対で、自分の実力に自信がない傾向が見られる。

5

「つぶやき」が生きる仕組み不足

児童の思考の過程である「つぶやき」を教師が拾いきれていない。また、児童自身も安心してつぶやける環境が十分に整っているとはいえない。

02

児童の実態と課題から生まれた 研究主題と今年度副主題

以上の実態を踏まえ、言葉を介した他者とのつながりを重視し、以下の研究主題を設定した。また、3年計画で研究主題を目指すにあたり、1年目の副主題を設定した。

研究主題

言葉でつながり、共に学びを紡ぐ子の育成

読解力や表現力の乏しさを克服し、言葉を使って他者と関わり合いながら、自分たちの学びを創り上げていく力を育ていく。

1年目副主題

「聴く・つぶやく」から始める、言葉への親しみ

表現のハードルを下げ、まずは相手の話に耳を傾ける（聴く）ことや、思考の断片を言葉にする（つぶやく）ことから始め、言葉に対する安心感と親しみをもたせることを目指す。



2年目副主題（仮）

「型」の活用を通した、思いを届ける表現力の向上

3年目副主題（仮）

目的意識をもって読み、主体的に考えを深め合う授業の創造

03

目指す子どもの姿

本校が目指す「言葉でつながり、共に学びを紡ぐ子」の姿について、研究主題と今年度の副主題に基づき、具体的に整理する

土台：言葉への親しみをもつ姿【聴く・つぶやく】

聴く姿

単に聞こえている
状態を超える

- （単に聞こえている状態を超えて）話す人の方を向き、姿勢を正して意識を集中させる。
- うなずきなどの反応を返ししながら、相手が言わんとすることを理解しよう（イメージしよう）とする。
- 友達が自信をもって話せるよう、「何を言っても大丈夫」という雰囲気を作り、最後まで耳を傾ける。

つぶやく姿

思考の断片を言葉に

- 考えの途中や「わからない」という思い、ふと浮かんだ「ハテナ」を、整理される前でも口に出す。
- 発表よりもハードルの低い「つぶやき」を通して、自分の内側にある言葉を外へ出そうとする。
- 友達のつぶやきに反応し、そこから自分の思考を動かし始める。

言葉でつながる

（教員アンケートなどで示された、言葉を介して他者と関わり合う具体的な姿）

言葉で

つながる姿

意見の連鎖が生まれる

- 意見を聞き、「似ているな」「同じだな」「少しちがうな」「わからないな」などと、自分の考えと比べた結果を反応として示す。
- 誰かの意見に対し、そして、「なるほど」「私も〇〇だと思った」「それに付け足すと……」と、言葉を繋いでいく。
- 「〇〇さんの意見を聞いて、こんな風に考えが変わった」というように、他者の言葉を自分の思考の再構築に生かす。

必要感のある交流となる

- 単なる「話し合い活動」としてではなく、自ら「伝えたい」「確かめたい」という必要感をもって周りとの意見を交わす。
- 同じキーワードや教材から感じ取った多面的な捉え方を、互いに語り合う。

最終像：共に学びを紡ぐ姿

(3年間の研究を通じて最終的に実現したい児童の姿)

友達の言葉を受け、自分の考えを言葉で表そうとする姿

他者の存在を前提として、自分の内なる思いを適切な言葉を選んで表現しようと試行錯誤する姿

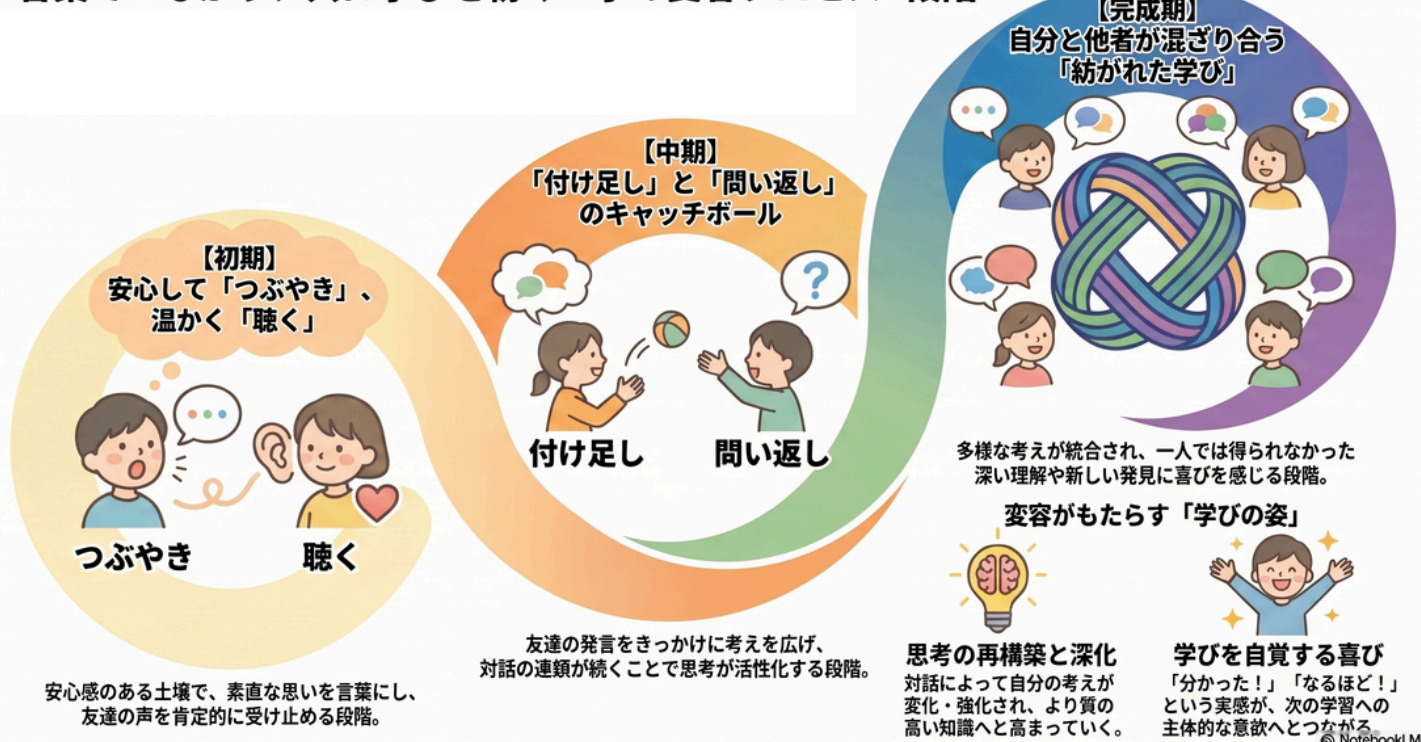
他者とかかわり、考えを深めたり確かめたりする姿

自分一人の考えに固執せず、対話を通して納得解を作り上げたり、新たな視点に気付いたりする姿

自分の学びを適切に振り返り、次につなげようとする姿

「わかった」「できた」「まだわからない」「知りたい」という思いを自覚し、学習の前後で考えがどう変化したかを客観的に捉える姿

言葉でつながり、共に学びを紡ぐ：子の変容プロセス3段階



04 現在求められる学び・授業と本研究のつながり

令和8年度から始まる本校の研究構想が、現行の学習指導要領の理念および札幌市の学力育成プランとどのように結びつくのか、以下の4つの視点で整理する。

1. 「資質・能力の三つの柱」とのつながり

学習指導要領では、教育課程全体を通して「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱をバランスよく育成することを求められている。

● 思考力、判断力、表現力等

「人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」ことを重視している。本校が目指す「友達の言葉を受け、自分の考えを言葉で表そうとする姿」は、この力の育成に直結する。

● 学びに向かう力、人間性等

「他者を尊重し協働しながら、よりよい社会の創り手となる力」が求められる。本校の「他者とかかわり、考えを深めたり確かめたりする姿」は、この人間性等の涵養と整合している。

2. 「言葉による見方・考え方」を働かせる

本校の研究は、国語科の授業実践を通し、日常の授業改善を目指すものである。

学習指導要領では、国語科の目標に「言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育てることとある。

● 言葉への自覚と親しみ

指導要領における「見方・考え方」とは、言葉の意味や働きに着目して捉え直し、言葉への自覚を高めることである。今年度の副主題「『聴く・つぶやく』から始める言葉への親しみ」は、言葉を単なる伝達手段ではなく、思考を深めるツールとして捉えるための基盤作りであり、指導要領の趣旨を具現化するものといえる。

● 相手とのつながりをつくる働き

特に高学年では「言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付く」ことが指導事項として新設された。本校の主題「言葉でつながり」は、この指導要領の新しい視点と一致している。

3. 学習過程（AARサイクル）と授業改善の視点

札幌市は、AARサイクルを単元や題材に位置付けて構成することで、子ども一人一人の主体性を大切にしながら多様な学びを実現し、学ぶ力の育成を目指している。

- **Anticipation（イントロダクション・見通し）**

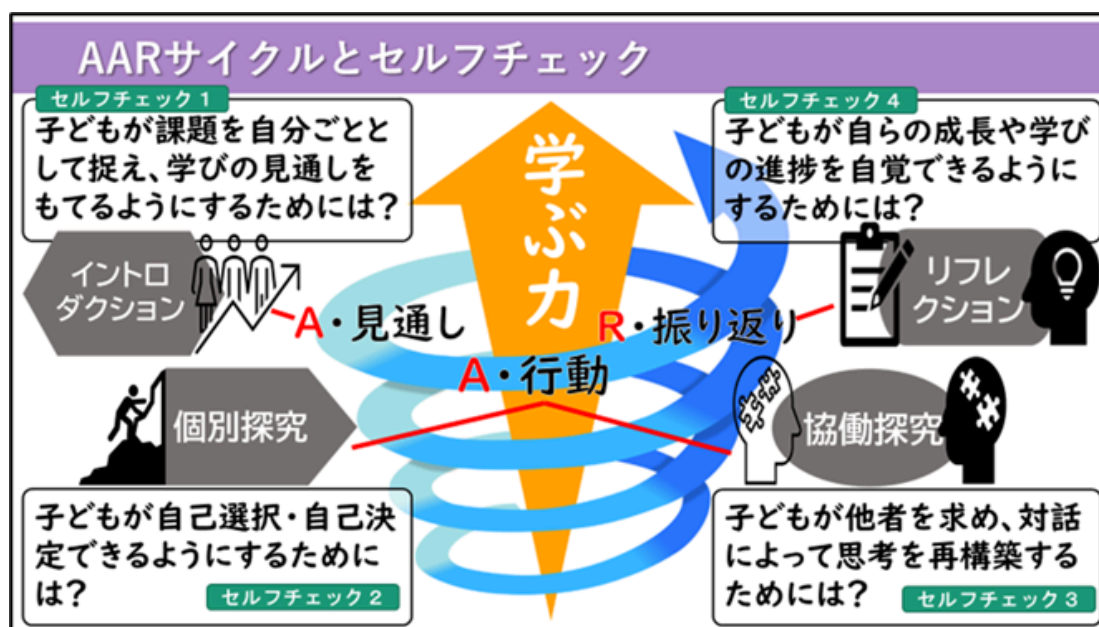
「ハテナ」や「知りたい」という「つぶやき」を引き出すこと、学習の必要感を生む。

- **Action（個別探究・協働探究・行動）**

研究主題の核心である「言葉でつながる」姿（付け足し、問い返し、意見の連鎖）を実現する場である。視点2「教師のかかわり」によって、子ども同士の意見を繋ぎ、個の学びを全体の学びに還元していくプロセスは、まさに協働探究といえる。

- **Reflection（リフレクション・振り返り）**

目指したい児童像の3つ目に「自分の学びを適切に振り返り、次につなげようとする姿」がある。これは、札幌市が課題として挙げている「リフレクション」の充実とつながる。



4. 言語能力の育成（学習の基盤）

学習指導要領では、言語能力を「全ての教科等の学習の基盤」と位置づけ、国語科を要として全教育活動で充実させることを求めている。

- **読解力と語彙の課題解決**

本校の実態として挙げられている「読解力の不足」や「語彙の不足」への対応は、指導要領が「喫緊の課題」として挙げている「文章を読み解く力」や「語彙を豊かにする指導」の改善方針につながる。

- **聴くことの重要性**

指導要領では「相手の発言を受けて話をつなぐ（低学年）」「司会などの役割を果たしながら、意見の共通点や相違点に着目して考えをまとめる（中学年）」ことが段階的に求められている。本校が「聴く・つぶやく」を副主題に据え、対話の土壌を耕すことは、これらの系統的な能力育成の第一歩となる。

令和8年度の重点 「聴く・つぶやく」を生む

研究副主題に基づき、「聴く・つぶやく」を授業内で生むことを今年度の研究の重点とする。

「聴く・つぶやく」とは、児童が言葉に慣れ親しむための初期段階の言語活動である。いきなり発表や書いて表現することを求めるのではなく、まずは他者の言葉を「聴く」ことで語彙や表現に触れ、「つぶやく」ことで自分の考えを小さな言葉として外に出す経験を積み上げていく。このような「聴く・つぶやく」の積み重ねを通し、言葉に対する心理的抵抗感を軽減し、安心して言葉を使おうとする態度を育むことを目指す。

「聴く」とは

- **言葉を受け取ること**

聴くことの第一目的は、他者の考えを知ることである。また、表現が苦手な子にとって、最大の支えとなるのは「聴いてくれる仲間」の存在である。聴く側が言葉を大切に扱うことで、伝える・伝わるの関係性を構築する。

- **「何を言おうとしたか」を想像すること**

相手の言葉が不完全であっても、その奥にある思いを受け取ろうとし、自分なりの言葉に変換して考え始める。

- **思索的な沈黙を待つ**

直感的に言葉が出る子もいれば、ぽつりぽつりと紡ぐ子もいる。多様な思考のスピードを認め、互いに待ち、受け入れる時間も「聴く」ことに含める。

「つぶやく」とは

- **「学びに向かう姿・人間性」の表れ**

「話したい」「伝えたい」という内発的な意欲が、つぶやきとして表出される。

- **不完全な言葉で大丈夫**

つぶやきに、正解や分かりやすさは求めない。思考の断片であるため、言葉にできそうで、できないことがある。

- **今、「何に気付いたか」「何を考えているのか」**

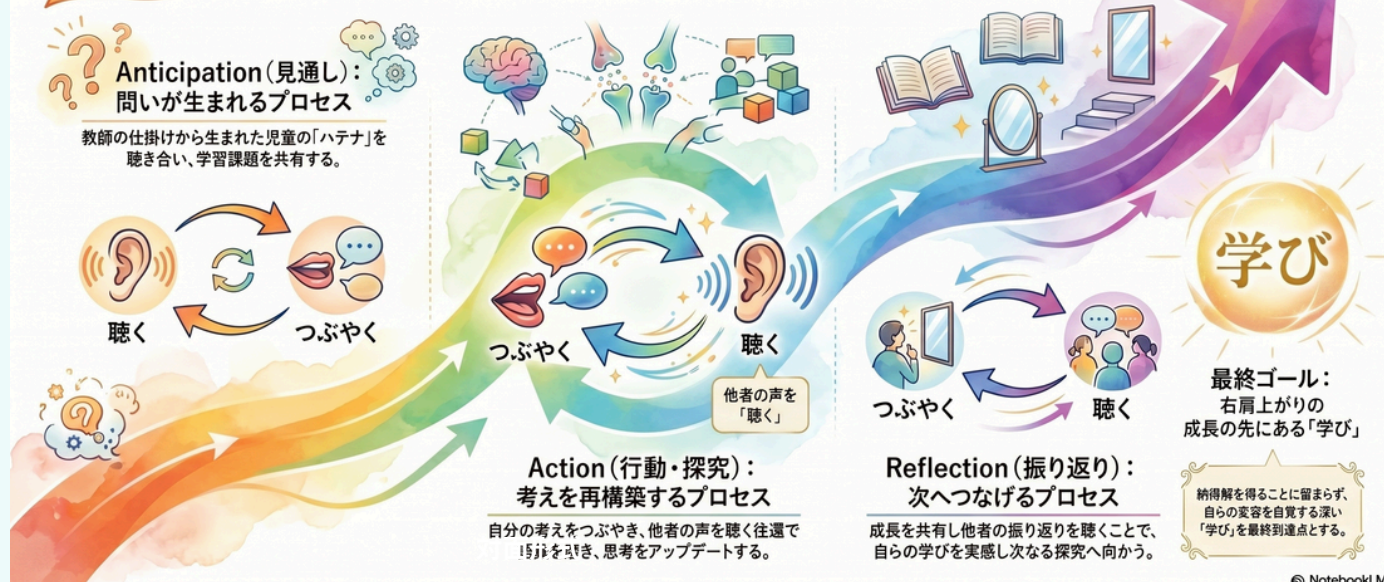
「何を言うか」の結論だけでなく、「どんなことに気付いたか」「何と云えばいいか迷っている」というプロセスをみんなで共有し、言葉を紡ぎ合う。

「聴く」と「つぶやく」は、それぞれ独立した活動ではなく、相互に作用しあいながら子どもの思考を促すものである。児童は他者の考えを「聴く」ことで新たな考えや語彙に触れ、それをもとに「つぶやく」ことで自分の考えを言葉にしようとする。

さらに、そのつぶやきをもとに再び他者の考えを「聴く」ことで、自分の考えとの違いや共通点に気づき、思考を深めていく。このように、「聴く」と「つぶやく」を行き来することで、主体的で深い学びにつながると考える。

言葉でつながり、共に学びを紡ぐ：AARサイクルにおける「聴く」と「つぶやく」の往還

研究主題：言葉でつながり、共に学びを紡ぐ



重点「聴く・つぶやく」を生むために… 研究の視点1

視点1＝土台（空気・文化）

「聴く・つぶやく」が生まれる学級経営・日常実践

児童が自分の考えを言葉にし、他者の考えを受け止めるためには、安心して言葉を表出することのできる学級の雰囲気也不可欠である。そのためには、発言の正誤ではなく過程を大切にする教師のかかわりや、互いの考えを受け止める関係づくりが重要となる。

また、「聴く」態度を意識的に育成するとともに、まずは小さな声でのつぶやきを許容する環境を整えるなど、児童が言葉を使うことへの心理的な抵抗感を軽減することを目指す。

さらに、これらを特別な場面ではなく、日常的な実践で常に意識することで、「聴く・つぶやく」が自然に行われる学級を目指す。

その1

学級の実態に合わせて、教師が目指したい学級の姿を具体化

「聴く・つぶやく」が自然に起こる学級って？（目指したい学級）

- ・小さな声（つぶやく）が許されている。
- ・挙手による発言がなくても「参加している感覚」「当事者としての感覚」がある。
- ・誰かが話し始めたら、その子に向く習慣がある。
- ・友達の話最後まで聴く文化がある。
- ・間違いを否定されない。等

その2

学級経営や日常実践で何を意図し、どうかわるか

安心して言葉を出せる関係づくり

- 誤答をどう教師が扱うか
- 完全な言葉を求めない
- 思考の過程を価値付ける

聴く態度を育む

- 話している人を見る
- 最後まで聴く、うなずき、相づち
- 不完全な言葉を受け止める

つぶやきが許される環境

- 課題提示後に必ずつぶやく、
ハテナをつぶやくなど
- 発言のルールづくり
教師による交通整理は必須

日常的なしくみ

- 朝の会のスピーチ
- 一言振り返りコーナー
- 係活動での自治的な声
- ハンドサインでの挙手

重点「聴く・つぶやく」を生むために… 研究の視点2

視点2＝授業内の具体的な工夫 (本時における)「聴く・つぶやく」が生まれる教師のかかわり

児童の思考を促すためには、授業の中で「聴く」「つぶやく」場面を意図的に設定することが重要である。そのために、複数の考えが生まれる発問や比較を促す問いを工夫するとともに、児童が自分の考えをもつための時間を確保したり、教材・教具を工夫したりする。

また、この視点2で大切になるのは、「つぶやき」を独り言で終わらせるのではなく、学びにつなげることだ。児童のつぶやきを価値づけたり取り上げたりする教師のかかわりが、つぶやきを学びへとつなげていく。我々教師が、つぶやきを拾う感度を上げ、つぶやきをどの順で、どのように取り上げ、どうつないでいくかを意図をもって実践していくことが、授業力の向上につながっていく。児童同士の考えの違いに気づき、自他の考えを比較し、思考の深まりを目指す。

昨年度までの成果（手立て）と新たな手立ての検証を行う

Anticipation（イントロダクション・見通し）

○自発的なつぶやきを引き出す「出会わせ方」

- ゲーム的要素やストーリー性のある課題、または意図的な「マスキング（情報不足）」を行い、児童から自然に「なぜ?」「どうして?」というつぶやきが生まれる場を作る。
- 単元の導入で「最後に解決すべき難しい課題」を提示し、学習の必要感とゴールへの見通しをもたせる。

○当事者意識（自分事）を生む

- 解決するの必要感のある課題
→ 色々な考えが出る課題、違和感が生まれる課題、比較ができる課題
→ 「話す」「伝える」ことの必要感

Action（個別探究・協働探究・行動）

○「対話の連鎖」を生む（昨年度の成果・本校児童の課題）

- 児童の些細なつぶやきを拾い、「今の子つぶやき、どう思う？」と全体に繋ぐことで、つぶやきの連鎖（付け足し・ハテナ等）を目指す。
- 話し合いのキーワードを統一して示したり、ネームプレートを活用したりして、対話の焦点を明確にする。
- ICTを用いたり、板書で可視化したりし、自分と友達の考えを比較し、思考のズレや共通点に気付けるようにする。
- 同じ考えの子にリレー形式で説明させることで、考えを認め合い、理解を深める場を作る。

③ Reflection（リフレクション・振り返り）

○学びの変容を自覚する。

- 「聴く」ことで自分の考えがどう再構築されたかを振り返る。
- 「もし〇〇の場合だったら？」といった、学びを広げ、深める発問により、次の学びへつなぐ。

○自己の学びを適切に評価する。（本校児童の課題）

- しっかりと言葉で振り返る。
- 振り返り方に視点を設ける。

「聴く」「つぶやく」が生まれた授業であれば、「聴く＝他者の考え」「つぶやく＝自分の考え」を授業の最後で比較し、そのズレに気付くことができるようになるはずだ。それを振り返ることで、「どのように考えたか」「どのように変化したか」という視点で具体的に振り返られるのではないだろうか。また、教師が「本当にここまで考えられた？」「もう少し考えられそうだね。」と、学びを適切に価値付けることも大切である。

（振り返りの視点 例）

- ① うまれる「分かった！」
- ② ふえる「もう1つ分かった！」
- ③ ふくらむ「広がった！」
- ④ ふかまる「やっぱりそうだ」
- ⑤ かわる「ちがう考えになった」
- ⑥ ぎもん「まだ分からないところがある。次は～を知りたい。」

国語科の授業づくり ～視点2のヒント～

国語科においては、児童が「言葉による見方・考え方」を働かせることが重要とされる。本研究における「聴く」「つぶやく」といった活動は、それ自体を目的とするのではなく、児童が言葉に着目し、表現や内容について考えるための手段である。

そのため、授業においては、どのような言葉に着目させるかという視点を明確にし、児童が言葉を根拠として考えを形成することができるような学びの深まりを目指す。

言葉による見方・考え方

国語科における、「言葉による見方・考え方」とは、文章や発話に用いられている言葉に着目し、その意味や働き、関係性を捉えながら理解したり、自分の考えを形成することである。

【見方】

「どの言葉が使われているか」「どのような表現の工夫があるか」「言葉と言葉がどのようにつながっているか」といった視点で、内容を捉えること。

【考え方】

見方をもとに、「比較する」「関係付ける」「要約する」などの思考を働かせること。

ただ「つぶやく」だけでは…

「聴く」「つぶやく」が生まれた際に、児童が積極的に声を出す姿は見られるものの、その内容が言葉に着目した内容になっていないという課題が想定される。

例えば、「おもしろいと思った。」「いいと思う。」といった感想にとどまり、どの言葉やどの表現に着目してそのように感じたのかが明確でない場合、国語科としての学びの深まりにはつながりにくい。活動が形式的にならず、「言葉による見方・考え方」が十分に働く状態を目指したい。

目指すべき「つぶやき」って？

国語科で目指したい児童の姿は、言葉に着目して自分の考えを形成し、それを他者と共有しながら深めていく姿ではないだろうか。具体的には、「『絶対に』という言葉が使われているから強い気持ちが現れているよ。」「前の文と比べると分かるよ。」などと、言葉を根拠としてつぶやく姿である。

授業で大切にしたい教師の心がけ

「聴く」「つぶやく」を通して、児童が言葉に着目した思考を行うことができるようになることが重要である。そのために、教師は「どの言葉に注目するのか」「何を比べるのか」といった視点を明確に示す必要がある。

また、児童のつぶやきに対して、「どの言葉を見てそう思ったの？」「なぜそう考えたの？」と問い返すことで、言葉を根拠とした表現へと高めていく。

学級の実態、先生方のそれぞれの課題に合わせた授業改善が大切を目指しましょう！

08 そのほか

○研究体制について

- ・ 特別支援ブロック（石澤・前田・伊田・瀬尾・伊東）
- ・ 低学年ブロック（半田・鳥谷部・梅森・宮下・小山）
- ・ 高学年ブロック（高橋・小田・七里・松本）

○研究授業について

- ・ 指導案形式…別紙参照
- ・ 国語「読むこと」の単元から選択をしてください。
- ・ 全員が1 実践公開します。
- ・ 低学年ブロック、高学年ブロックから1 実践ずつを全校研として公開します。全校研は放課後に、全員での話し合いの場を設定します。

【1 学期中】

全校研を行う学級の決定、研究授業の単元決定（全員）

【2 学期すぐ】

全校研の日時決定

【2 学期中】

全員の研究授業（授業検討、振り返り）

全校研

R8年度研究の振り返り

○研修会について

テーマ【国語の授業の作り方（仮）】

幌北小学校の市場義大先生を講師としてお招きし、4 年1 組で国語科の授業を行っていただきます。言葉にかかわる単発の授業を予定しています。放課後は、国語科の授業の作り方に関する講義を行う予定です。時期は6 月末～7 月を予定しています。